

同志社と社会福祉
—新島襄の良心の系譜—

講演	木原 活信〔きはら・かつのぶ〕
講師紹介	同志社大学社会学部教授
研究テーマ	社会福祉の哲学・思想、精神保健福祉論

同志社スピリットとは

同志社スピリット・ウィークということで、今日は「同志社スピリット」について一緒に考えたいと思います。端的に言うと、それは「新島襄スピリット」になるのだと私は思います。つまり、新島スピリット（新島襄の思想）抜きで同志社スピリットは私には考えられません。その捉え方には、さまざまな表現が考えられるでしょうが、私の専門にかかわる社会福祉の分野から新島襄と同志社に焦点を当てて考えてみたいと思います。

結論から申し上げますが、新島襄は、日本の社会福祉に重大な影響を及ぼしたどころか、その根幹を担ったとも言えるでしょう。ところが、新島襄と言えば、これまで教育、キリスト教の観点だけが強調されてきたように思いますが、実はそれと同様かそれ以上に、新島襄を日本の社会福祉史（慈善事業、社会事業）のなかで重要な柱として位置づけなければならないと、最近思うようになりました。後述しますが、日本の社会福祉史のなかには、「新島襄の系譜」あるいは「良心派の系譜」というものがあるからです。その一端を今日は考えてみたいと思います。

かつて同志社総長で、神学者であった大塚節治が述べた言葉によりますと、「固より新島先生は何等の神学をも残されなかつた」（大塚節治「回顧と展望」京都同志社大学神學科内基督教研究会編『基督教研究』20—1 基督教研究会 1942年）と述べていますが、それが事実であるとするなら、確かに新島襄は机上の「神学」あるいは今日の社会福祉理論に起因するようなことで、影響を残すようなことはなかったように思われます。しかし、今日の社会福祉のルーツとなった多くの慈善事業家、社会事業家が同志社出身者であるという点、しかも彼らの多くが共通に、「新島先生の精神を体現している、影響を受けた」と言っていることは大変、興味深い点です。

ところで新島自身は、自分の生き方として、「下民ノ友」「人民ノ木鐸（ぼくたく）」（新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』1 同朋舎出版 1983年 46、47頁。以下【1】46、47）、「人民ノ友トナレ」（【1】424）と述べていますが、これは現代の言葉で言えば、貧しい、弱い立場の一人ひとりの友としての生き方をモットーにしたということであろうと思われます。同じく同志社総長であった牧野虎次が述べた次の言葉は、本日のテーマの核心をついており、新島の福祉思想とその影響について如実に示しているかと思われますので以下そのまま引用します。

「薫陶を受けた者等が或は貧しき者の友を以て任し、或は囚はれたる者を放つことを志し、艱（なや）み苦める者に伍して終生そのサービスに尽さんと決心する様になつて来たことは、当然の結果と言ふべきであらう。即ち同志社精神が我国社会事業界に先立つて、その原動力を起したと見るべきであります」（牧野虎次「同志社精神と社会事業」『同志社校友同窓會報』1934年、傍線は筆者、旧字は新字体に改めている）。つまり、牧野が言う「同志社精神が我国社会事業界に先立つて、その原動力を起こした」という言葉こそ、まさに「同志社精神」（同志社スピリット）すなわち新島襄の精神が、日本の社会福祉の原動力であったという本日の私の主張、主題を端的に説明したものであると思います。

「一人一人は大切なり」

それでは、社会福祉界に影響を及ぼしたという新島スピリットとは、一体何なのでしょう。まずはそのエピソードから見ていきたいと思います。先述した大塚節治の言うとおり、確かに新島自身が自ら神学を理論づけ、体系立てた、とは言えないのは事実ですが、その生き様やエピソードの中には色濃く神学や福祉の重要なアイデアが反映されていると見るべきでしょう。そこでここでは、新島の論理としての神学や福祉理論ではなく、エピソードとしての「神学」「福祉思想」から取り上げてみたいと思います。その一つが、「一人一人大切ナリ」という新島の言葉にまつわるエピソードに象徴されています。（詳細は、【1】107参照。）

同志社には、国の重要文化財に指定されている礼拝堂などだけでなく、ぜひ見てほしいところがあります。それは「諸君ヨ、一人一人大切ナリ」という、新町校地の建物の壁面に刻まれていることばです。これは新島襄のスローガンのように思われていますが、厳密にはそうではありません。正確には、新島襄が1885（明治18）年に、同志社英学校創立十周年の記念式典の式辞の中で、「思わず」発したことばと言うべきでしょう。

新島の留守中に、ある学生が重大な問題を起こし退学処分を受けたのですが、式典の中で新島は、この学生の将来を嘆き悲しみ、涙ながらに感極まって口走ったのが「一人一人大切ナリ」ということばであったのです。つまり、そのことばは、学生である〇〇君という個人を想起しての具体的なことばであり、少なくとも上から目線の学校長の人生訓とか、理想の教育を語るスローガンではなかったと言えます。

新島はこの記念式典に臨席した多くの来賓の前で、感極まって学生退学にまつわる触れられたくない学内の不祥事、始末を包み隠さずに涙をもって語り、自責の念を表明して、一人の学生の大切さを力説したようです。「満場一人トシテ袖ヲ濡サル者ナカリキ」（【1】107）というほど、その印象が強かったようで、反響も大きかったようです。現在であれば、式典での「場違い発言」「場の空気が読めない（KY）発言」として非難されることでしょう。

その伏線にあったのが、新島がこの前後にアメリカの友人に送った以下の手紙です。「私がもう一度教えることがあれば、クラスの中でもっともできない学生にとくに注意を払うつもりだ。それができれば、私は教師として成功できると確信する」（現代語で読む新島襄編集委員会編『現代語で読む新島襄』丸善 2000年 179頁、原文は英文）。

これらは、聖書に親しんでいる人ならば、例のイエスの一匹の羊への眼差し（九十九匹の羊のたとえ）をも想起させることでしょう。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか」（ルカによる福音書15章4節）という有名な箇所です。それは、迷った羊の行動に非があったと叱責しているのでもなければ、残りの九十九匹の羊はどうなってもいいとか無責任な態度を言っているのでもありません。または組織の効率性のことを問題にしているのでもなく、むしろ、ここでは、迷える一匹の羊を大切に想う羊飼いの熱い情熱を語っているのだと思います。

つまりその真意は、イエス自身の失われた一人一人への常識外れの情熱です。常識的に言えば、「九十九匹もいるのだから一匹ぐらいはいいのでは」ということになります。しかし、イエスは、価値なきものと思われている小さなもの、失われた一匹の羊を大切に想い、それに対して自らの命を犠牲にしても、それを捜す価値あるものと見なしているのです。自らがこの地上にきた目的を「失われたものを捜して救うために来た」（19章10節より）と明言し、「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」（ヨハネによる福音書10章11節より）とまで言うのです。逆に言えば、イエスにとってそれほど「一人一人」、しかも「迷える弱い一人一人」が大切なのだということです。

皆さんも自分が一番大切なものを想像してみてください。それがもしなくなったらどうするでしょうか。ちょっと捜してみても見つからなければ、「まあいいか」では済まないでしょう。もしそうなら、元からそれほど大切ではなかったということです。親にとっては自分の子がいなくなれば必死になるはずですが。私も親として迷子になった息子を捜した経験がありますが、息子がいないときは、我を忘れるほど動揺して必死で捜し歩いたことを覚えています。

イエスの想いというのも、迷子になっている子どもを捜し回るような切迫感をもって、あるいはそれ以上の桁外れの情熱をもって、失われた人を捜しているのです。これこそがキリスト教の福音の本質であり、そしてそれが福祉の源泉でもあります。これが近代の欧米の社会福祉思想の根底にあるものと言えるのですが、新島がアメリカ滞在で学んだものです。

この新島の思想を受け継ぎ、その教え子が明治時代に福祉の実践家として先駆者として活躍しました。非行少年のための施設（現在の児童自立支援施設）である北海道家庭学校を創設した留岡幸助（1864～1934、牧師）、貧しい人たちや虐げられていた女性たちを解放した日本救世軍の先駆者となった山室軍平（1872～1940、伝道者）らにはあまりに有名です。彼らは未だ福祉制度が整っていない明治時代の封建社会や富国強兵の価値観で固まっていた社会に抗って、貧しさや飢えに苦しむ人たち、非行少年たち、孤児たち、売春を強いられた少女たちというような、社会から忘れられ、国家ですら見捨ててしまうような「小さい」一人一人ひとりの救済に福音の灯を掲げて「地の塩」として近づいていったのです。これが、牧野の「同志社精神が我国社会事業界に先立つて、その原動力を起こした」という表現にあるとおり、強烈な原動力となって、結果として近代の日本の社会福祉の基礎を作っていったのだということなのです。同志社出身の福祉実践家が近代の社会福祉の基礎を築いたということは、歴史家も認めるとおりです。

新島襄のアメリカの福祉施設見聞録

このような新島襄ですが、繰り返しますが、社会福祉について書籍や抽象的な思想から学んでそれを理論づけて弟子たちに教えたわけではありません。今述べたように、言わば彼のキリスト者としての良心に根ざした生き方を通して、弟子たちに福祉マインドを鼓舞したということになるでしょう。しかしそれだけでなく、実際に彼は、アメリカ留学中に文字通り、他の日本人の誰よりも先んじて欧米の福祉事情を見学し、それを早くから実感していた最初の日本人であったというのも事実です。その意味では彼の語る「福祉」や福祉施設事情には、リアリティが伴っています。たとえばアメリカでは、目の見えない人には専用施設があり、貧しい人々には救護が、親のいない子供たちには専門的施設があったという見聞録を記録していますが、当然、弟子たちには強いインパクトがあったことでしょう。

注目すべきは、「基督教初リテ病院ノ挙アリ、幼院ノ挙アリ、養老院ノ挙アリ」（【2】467）というように、それをキリスト者の愛と良心の実践の徳目として捉え、キリスト教との関係として捉えているのが特徴です。ですから、日本で最初に神学科に社会事業学専攻（社会福祉学の前身）が1931年に同志社に創設されたというのも、偶然ではありません。また新島は、明治時代から広義の意味において「福祉」という単語をかなり頻繁に使っているのも、もう一つの特徴です。

その中の幾つかについて、網羅的になりますが、彼の遺した福祉施設の見聞記録から以下、抜粋して紹介しますのでご参照ください。原文は読みづらいので、同志社編集の岩波書店の3部作の一つ、『新島襄自伝』から引用しておきます。

新島襄の欧米福祉施設見聞録（ ）内ページ数は岩波および全集の頁
1872年4月5日
「私たちは州立刑務所に行った。男女合わせて六千十五人（六百十五人か）が収容されている。女性は僅か十人だった。彼らは刑務所内の部屋で働いている。靴を作っている者がいた。週に五足作るのだが、ノルマ以上を作った者には金が支払われる。今日見たうちの一人は年間六百ドルも稼いだという。椅子を作る者、そして非常に簡単な安物の絨絨（じゅうたん）を織る者もいた。三棟は一階建て、他は二階建てだった。建物群の中心に立つと、そこからは七つの建物全部の内部が見通せた。彼らはそれぞれの部屋で安息日の礼拝を守っている。説教者はホールに立って説教する。ホールは非常に長いけれども、独特の狭い構造のせいで、その声は全員に聞こえる。受刑者たちは図書室から本を借りることができる」（『新島襄自伝』133～134、以下同133～134、【7】35）。

1872年4月6日
「午後私たちは、フィラデルフィア市の西の部分にあるブロックリー教貧院を訪れた。貧民、身体障害者、孤児のための部屋があり、男性と女性、幼児、身寄りのない貧しい老女たちのための入院施設もあった。知的障害者用の病院には男子八百五十人が入っている。授産施設では仕立て、靴作り、織物、石鹸作り、銅器作り、ペンキ塗り等が行われている」（同134、【7】35）。

1872年4月30日
「ハートフォードに赴く。先ず聾啞院（ろうあいん）を参観。教授法は全く手話による。男女合わせて数百人の入所者がいた。五年ないし八年も入所する人がいるとのことだった。そこでは手仕事も教えられる。靴作り、戸棚作り、洋服の仕立て等である。院長はストーン氏である。（中略）トリニティ・カレッジの校舎のまわりを馬車で一周し、精神障害者施設を訪れる。篤志家の作った法人が運営している。入所者は百五十人。（中略）次にメリデンに行き、州立感化院（児童自立支援施設）を参観。約三百人の男子が入っている。彼らの大半は、椅子の座部を作っている。彼らは一日のうち一定時間、働かねばならない。一日六時間働き、四時間半学習する。内容はスプリング、読み方、書き方、算数である。授業はきびきびしていて、素晴らしかった。いくつもの足し算をやったが、とても早かった。私たちは食堂も見た。彼らは夕食にミルクとパン、もしくは糖蜜とパンを食べていた。夕食後に授業が始まる。私たちは感化院の院長であるハッチ博士のお宅でお茶を頂いた」（同139～140、【7】35）。

帰国してからも、ジョージ・ミュラーや、その後の欧米福祉施設への関心は続き、それを記した見聞録もありますので、興味ある方は全集をじっくりお読みください。その中に新島
の先見性的一端がうかがわれます。

新島襄の福祉思想

さて、新島襄がアメリカで直接に見聞した福祉事情について網羅的に紹介して取り上げてみましたが、新島襄のアメリカ体験のなかで染み付いた思想をさらにもう少し掘り下げて分析するなら、それは三つの点に集約されると思います。それは、（１）Congregationalism、（２）Voluntarism、（３）「良心」であろうと思っています。

まず（１）のCongregationalismとは会衆派主義ということですが、新島が所属していたプロテスタントの教会の宗派の思想です。それは新島がアメリカの伝統として受け継いだ信仰そのものと言ってもいいかと思います。新島は、後に日本において宗派を合同して一つになろうとする動きとして起こった教会合同運動に強く反対します。当時のもう一つの大きな宗派であった長老派教会との合同を歓迎する周囲の動きを断固拒否します。平和を愛し、穏健な新島には意外に思われますが、この点は、頑なに譲らなかったことから、彼の会衆派主義への拘りが分かります。当然、彼は、キリスト教宣教師の立場ですから、自分の属する宗派への拘りは当たり前なのかもしれませんが、新島が拘ったのは、そのような偏狭な教派主義ではなかったようです。新島が大切にしていたのは、会衆派としてのセクトではなく、教会の運営手法（教会政治）です。長老派のように言わば一部の代議によるような運営方法ではなく、それは牧師も神の前には一人の信徒であり、徹底的に教会員全体の合議という民主主義手法であることを強調しています。会衆派が別名、「組合派」とも言われた所以です。この民主主義的発想こそは、福祉の根幹をなすものであり、今日に至るまで会衆派の影響を受けた教会が「社会派」とも称され福祉活動に積極的にコミットするという点にも繋がっているのかもしれませんが。また会衆派の伝統として、それぞれの地域の教会は自主・独立という発想があり、他教会からの干渉は受けないという点も明確です。これは次の（２）の思想にも通じます。

新島が強調したもう一つの点は（２）Voluntarismです。これは、今日の福祉ボランティアと通じますが、新島が強調したのは、ボランティア精神という狭義の意味とはニュアンスが異なり、ここでは英米流の「抵抗」「独立」の論理としてのVoluntarismという原型的意味です。17世紀の英国であれば、この思想は、国王に対して勃興した市民たちの抵抗の論理、そしてピューリタン革命に至る近代革命へと繋がりました。また英国国教会に対してのスコットランド教会の自主独立という教会の独立運動に、その言葉の原義があるとも言われています。またアメリカでは、英国からの独立という思想にも結晶化される壮大な思想にも繋がります。それは、近代日本の場合、新島が拘った国家（官）に対しての個人や民間による自主独立が徹底した姿勢です。官（国）学ではなく、「私学」同志社の設立理念にもそれは色濃く明示されているものです。それは当然、今日の自主性という意味での奉仕精神としてのボランティアにも繋がりますが、その原型は自主独立の強烈なエートスです。このような発想は、イギリスの中では、18世紀末から19世紀にかけての国家的な福祉制度を凌駕するような、セツルメント運動などVoluntarismとして花咲き、今日の民間による自発的な福祉を形成することになります。

さて（１）（２）に加えて、特に強調したいのは（３）の新島の「良心」という発想です。昨年から始まった「良心学」という特別講義で詳しく説明していますので、興味がある人は、それを受講してもらったらと思いますが、同志社スピリットの根底にあるものは、新島の「良心」にあると言っても過言ではないと思います。彼は、「一国の良心ともいべき人物」を養成することが同志社の教育理念（同志社大学設立旨意書）であると率直に述べています。「良心之全身ニ充滿シタル丈夫（ますらお）ノ起リ来（きた）ラン事ヲ」という正門の前の良心碑は皆さんがいつも見ているものかと思いますが、新島の教育理念そのものです。そこで、その際に、新島が言うところの「良心」とは何を意味したのかということです。新島は、大学設立の旨意書や手紙や講演の中でさまざまな形で頻繁に良心について触れていますが、その一つでは以下のように述べています。「道徳心を磨き、品性を高め、精神を正しく強めるように勉め、ただ、技術や才能ある人物を育成するだけでなく、いわゆる良心を手腕に運用する人物」（『同志社大学設立の旨意』【1】132）。これはつまり、新島が同志社で学ぶ目的は、あらゆる事柄に直結するテクニクという表層的なものではなく、その背後にその人間が動かすものとしての良心ということをもって、行動することのできる人物というダイナミズムこそが重要であると指摘していると思われる。また一方で「それはただ、キリスト教の神を信じ、真理を愛し、他人に対する思いやりの情に厚いキリスト教の道徳によって、一国の精神となり、活力となり、柱石となる人物である」と述べているところから、新島にとってそれはキリスト教と直結するという点が特徴的です。新島は、これらの良心を手腕に、同志社で育った人間が、国家、社会に出て行くことを宿願としたのです。

それが当時の明治時代にあって、国家も無視するような深刻な底辺社会の暗黒である社会問題に対して社会的良心をもっている人間が、最も弱い立場の人々の救済へと結びついたことは、容易に想像できるのではないのでしょうか。同志社の出身者が活躍したのは、当時の社会問題であった障がい者問題、児童問題、監獄問題などです。これらは同志社出身者が先駆者とされていますが、世間が見捨てた犯罪者、非行少年たちへ接近した留岡幸助、「女郎」として売られていた貧しい女性たちの解放に尽力した山室軍平、など同志社派の活躍は枚挙に暇がありません。この人たちは、同志社の出身者たちで、一群の群れをなすごとく活躍していきます。新島襄の「良心」教育が弟子たちの福祉実践に火を焚き付けたと言えるでしょう。

かつて「政治の早稲田、経済の慶應、福祉の同志社」と故小倉襄二名管教授は、日本の三大私学を説明しましたが、これは、神学者であり、元総長の海老名弾正の「政治の早稲田、経済の慶應、精神の同志社」からの援用（あるいは修正）かと思われます。小倉は、海老名が言う同志社の「精神」という抽象的なものをより具体的な同志社スピリットに置き換えて、それを「福祉」と呼んだという意味では、あながち外れているとは言えず、的を射たセンスある表現だったものと思われます。それほどに、新島襄の弟子たちから、同志社では多くの社会事業家を輩出していったのです。

（資料１）井垣章二他著『社会福祉の先駆者たち』に取り上げられた人物一覧
（実践）留岡幸助、山室軍平、八濱徳三郎、牧野虎次、大塚素（しろう）、井深八重、中村遙、野村かつ子、更井良夫、賀集一、大塚達雄、福井達雨
（研究）竹中勝男、竹内愛二、大林宗嗣、嶋田啓一郎、ドロシー・デッソー、岡田藤太郎、金徳俊

ところで、社会福祉の歴史家の第一人者と言われた故吉田久一は、かつてこのような新島襄の影響を受けて育った同志社に連なる福祉に携わった人物たち（社会事業家）のことを、「良心派」と呼んだことがありますが、小倉は、それを「同志社派」と端的に称し、そのモットーは「底辺へむかう志」と表現しています。

その「良心派」「同志社派」と言われた人物は、たとえば社会主義者、安部磯雄のようなイメージとして、明治・大正時代の社会主義とキリスト教を融合させたと説明されることが多くありました。私は、その説明はあまりにもステレオタイプで実際に根拠が乏しいものと思います。なぜなら、（資料１）に示すようないわゆる「同志社派」について具体的な人物を挙げてみると、皆無とは言わないまでも、当時の多くの社会事業家に比して、あまり濃厚に社会主義思想との関連は見られません。むしろ共通しているのは、それぞれが新島襄の影響を強く挙げ、その多くが会衆派のキリスト教の影響下にあったということです。つまり常に国家からは独立して、「私」の民間人として自主的なものとして、ボランティアに自らの眼の前にある社会問題を憂え、そしてその各自の良心の痛みを激しく感じ、当時の誰も目を向けない社会の「底辺」へ徹底的に向かっていった人物であったのです。それが結果的に、冒頭で触れたように牧野が紹介した「同志社精神が我国社会事業界に先立って、その原動力を起こした」ということになるのでしょうか。つまり、明治・大正期の時代状況の中で、会衆派主義キリスト教、ボランティア、同志社という一連の思想に、「良心」が「起爆剤」となって、結晶化して生じたというのが、思想的には合点がいく説明のように思うのです。こうして「同志社派」と言われる一群の群れが誕生していきます。

良心の系譜としての同志社社会福祉

ところで、日本の社会福祉の大きな流れは、宗教的慈善→社会事業→厚生事業→社会福祉という枠組みで捉えるのが定説になっていますが、同志社の社会福祉も文字通りこれに対応します。それは、神学（慈善）→社会事業学→厚生学→社会福祉と発展していくのです。つまり、慈善から社会福祉へという社会福祉の変遷の流れは、そのまま、同志社の社会福祉の

歴史的変遷と同じということになります。一方で、その逆として同志社の先駆的思想や教育が、日本の社会福祉の歴史の変遷へ影響を及ぼしたとも言えるでしょう。
ちなみに同志社の社会福祉の系譜・変遷は次に示した年譜のとおりです。

同志社大学社会福祉学科の年譜
1931（昭和6）年 文部部神学科社会事業学専攻
1941（昭和16）年 文部部文化学科厚生学専攻
1944（昭和19）年 法文学部厚生学科（1946文学部社会学科）
1948（昭和23）年 文学部社会学科社会福祉（学）専攻
（1950（昭和25）年 大学院 文学研究科社会福祉学専攻開設）
2005（平成17）年 社会学部社会福祉学科

留岡幸助、山室重平らの新島襄の教え子たちが明治時代、大正時代に慈善事業家、社会事業家としてすでに社会に出ていったことを契機に、それを教育の一環としてとらえ、そのような人物を大学として組織的に養成し、世に送り出していこうと、1931年に神学科社会事業学専攻として産声を上げるのがその起源です。その時の経緯は以下のように説明されています。

「わが神学科に社会事業専攻を置くは蓋し、基督教信仰によりて立つ人物にして、同時に社会改造の専門的技術家を養成せんためである。さればこゝよりは、直接各府県市の社会課に属し、或は公私の社会事業に携る者も、個人的に労働運動、協同組合運動に参加する人物も、又は教会を中心とする教化事業に携る人も、或は社会記者として与論の教育に任ずる者も将来輩出されるであらうが彼等が等しく右の目的に依るところのものである。わが神学科はかゝる目的に向つて精進奮闘せんとする青年男女学徒を歓迎するものである」。

（『同志社校友同窓會報』 1931年1月15日 旧字は新字体に改めている）

また、後の総長となる大塚節治は、以下のように同志社において社会福祉（社会事業）学科を置く意義と目的を説明しています。

「社會事業は既に今日國家の重要な職能の一つとなり、單なる常識や技術の域を脱して、一つの科學的組織的建設を必要としつゝある。之が眞正の發達にはどこまでも之が學術的科學的研究の進歩が伴はなければならない。本學は既に本邦社會事業の發達に重要な開拓的人物を出したのであるが、今後もこの方面に信仰あり見識あり準備ある人物を送り出す事を念願せるものである。基督教信仰と開拓的研究的熱心とは、同志社が我國社會事業界に送り出す人物の特色たらしめたいと期せるところのものである」。

（大塚節治「本學の社會事業教育」『同志社大學社會事業學會報』第2号 1937年）

大塚の言うところの「基督教信仰と開拓的研究的熱心とは、同志社が我國社會事業界に送り出す人物の特色」とは、「同志社スピリット」に基づく社会福祉という本日のテーマに相応しい、新島襄ゆかりの福祉について物語っている言葉です。こうして、今日の社会福祉学科の前身として社会事業学専攻が設置されます。この経緯については、改めて別に詳細についてお話しできればと思いますが、当初は神学科の中に位置づけられて、キリスト教関係の文脈として誕生します。

さて、1931年に誕生した社会事業学専攻創設から早くも85年の歳月を経ました。その直後、日本の戦争による軍国主義という負の遺産の影響を受けながら、国家主導で「厚生事業」と学科名変更を余儀なくされるなどの困難もありました。戦後は、母体を神学から離し文学部に属しながら今日の社会福祉学科へと変遷し、以降、教員も変遷を経ながら、「良心を手腕に運用する人物」を社会福祉界に輩出し、発展を続けて今日に至っています。

2005年には文学部から社会学部の中に社会福祉学科として位置づけられていますが、国家資格としての社会福祉士や精神保健福祉士の資格にも対応し、今日まで日本の社会福祉教育のリーダー的存在として健闘し続けています。

それは、これまで繰り返し述べてきましたように、そのルーツを遡れば新島襄の系譜の延長線上にあるのです。まさに同志社スピリット、すなわち新島襄のコングリゲーションリズム、ボランティアズム、そして「良心」の精神が色濃く反映され、そして具体的な形として今に至っていると言えます。それは良心教育の果実ということもできるかと思います。新島襄に鼓舞され、火を焚き付けられた多くの新島の弟子たちが、社会の底辺にあって苦しむ人々のところであって、脈々と「良心派」として、息ついているのだと思います。

同志社の社会福祉関係教員関係者年代別一覧

前史 慈善時代 同志社英学校、神学校時代 1875－1930	新島襄、新島八重、山本覺馬、デービス （留岡幸助、山室重平、牧野虎次らを輩出）
神学科社会事業学専攻時代 1931－1940	竹中勝男〔30－53〕、大林宗嗣〔35－44〕、嶋田啓一郎〔35－80〕、賀川豊彦（客員）
厚生学時代 1941－1947 （1944－1946法文学部厚生学科）	竹中勝男〔30－53〕、大林宗嗣〔35－44〕、嶋田啓一郎〔35－80〕、竹内愛二〔42－46（48年関学移籍）〕
社会福祉（学）専攻時代 1948－	竹中勝男〔30－53〕、嶋田啓一郎〔35－80〕、中條毅〔49－66（66－91産閑）〕、Jean H. Grant〔50－61〕、小倉襄二〔50－97〕、Mary F. Wood〔50－74〕、井垣章二〔53－93（93－98社会）〕、大塚達雄〔54－92〕、Dorothy Dessau〔58－70（51－55大学院嘱託講師、56－57訪問教授）〕、住谷馨〔59－94〕、角田豊〔64－66（66－78産閑）〕、井岡勉〔71－07〕、岡本民夫〔80－07〕、渡辺武男〔93－04（77－93社会）〕 （但し、現職は除いている）

〔参考文献〕

井垣章二他著『社会福祉の先駆者たち』筒井書房 2004年
井上勝也『新島襄一人と思想』晃洋書房 1990年
梅本真寿郎「大林宗嗣の厚生文化政策」『キリスト教社会問題研究』62 同志社大学人文科学研究 所 2013年
北垣宗治『新島襄とアーモスト大学』山口書店 1993年
木原活信「同志社のアイロニー―山室重平の中途退学―」『新島研究』82 同志社新島研究会 1993年 139～162頁
木原活信「石井十次にみるジョージ・ミューラー観の変遷過程」『キリスト教社会問題研究』45 同志社大学人文科学研究所 1996年 1～27頁
木原活信「賀川豊彦とジェーン・アダムズ―セツルメントをめぐる―」『雲の柱』15 賀川豊彦 記念松沢資料館 1998年 8～12頁
木原活信『J・アダムズの社会福祉実践思想の研究―ソーシャルワークの源流』川島書店 1998年
木原活信「ジョージ・ミューラーが石井十次に及ぼした影響」『石井十次の研究』同朋舎 1999年 1～26頁
木原活信「キリスト教の世俗化と社会福祉の生成」『社会福祉の思想と人間観』ミネルヴァ書房 1999年 65～86頁
木原活信「福音と社会の結合（「連字符」）嶋田啓一郎の神学をめぐる」『キリスト教社会福祉学 研究』37 日本キリスト教福祉学会 2004年 4～13頁
木原活信『社会福祉と人権』ミネルヴァ書房 2014年
木原活信『「弱さ」の向うにあるもの―イエスの姿と福祉のこころ』いのちのことば社 2015年
同志社山脈編集委員会編『同志社山脈―113人のプロフィール』晃洋書房 2003年
同志社編『新島襄の手紙』岩波書店 2005年
同志社大学社会学会編『評論・社会科学』100 2012年
同志社々々史料編集所編『同志社九十年小史』同志社 1965年
上野直哉『同志社百年史』通史編1、2 資料編1、2 同志社 1979年
新島襄「ジョージ・ミューラー氏説教集序文」『新島襄 教育宗教論集』岩波書店 2010年 249～251頁
会衆主義教会研究会編『会衆主義教会について―キリストにある自由を生きる群れ』同信伝道会常任 委員会 2008年
会衆主義教会研究会編『会衆主義教会のあゆみ―キリストと共に進む宣教の展開』同信伝道会常任委 員会 2010年
室田保夫『キリスト教社会福祉思想史の研究―「一国の良心」に生きた人々』不二出版 1994年
室田保夫『留岡幸助の研究』不二出版 1998年
本井康博「福祉とキリスト教―新島襄と社会福祉（一）』『敢えて風雪を侵して―新島襄を語る（四）』思文閣 出版 2007年 176～197頁
本井康博「福祉界の良心たれ―新島襄と社会福祉」『元祖リベラリスト―新島襄を語る（五）』思文閣出版 2008年 220～235頁
山室重平『私の青年時代』救世軍出版供給部 1929年
吉田久一『日本の社会福祉思想』勁草書房 1994年

李善恵「賀川豊彦の社会福祉実践・思想が韓国に及ぼした影響に関する研究」同志社大学博士学位論文 2014年
同志社大学社会学会編『評論・社会科学』創刊100号記念特集 100号 2012年

2015年11月4日 同志社スピリット・ウィーク秋学期
京田辺校地「講演」記録

[＜HPでは傍線等を省略しております。詳細は冊子体の『Doshisha Spirit Week講演集 2015』をご覧ください。＞](#)